

体験談⑥

私の戦争体験

友國 富貴(ともくに ふき) 87歳

空襲の始まり 新宮市にて(当時小学校六年生)

空襲警報あのサイレンにおびえた日 ランドセル背に 壕に飛び込みき

「B29紀伊半島を北上中」 壕の穴より 怖々見上げき

壕の戸の節穴に見上ぐる小さき空 轟音の敵機 次々とゆく

(これが大阪大空襲のB29の編隊でした)

日の丸で出征兵士を駅頭に 汽笛と共の「万歳」忘れず

グラマンの超低空の機銃掃射 ねらはれし列車に 師の訃報きく

(三重県の田舎へ食料の買い出しに汽車に乗っていた前担任の先生が撃たれました。)

海藻も波飛沫あび食に採る 敵機襲来で 岩場の陰に

熊野灘は艦砲射撃あると言い 皆トンネルへと避難を急ぐ

迫りくる爆音机下に見上ぐれば グラマン兵と目の合ひし恐怖

食糧難空襲警報防空壕 みんな痩せてた戦争中は

大阪は大空襲とのニュースあり 節穴に見しあのB29か

スクリーンに見つむる出征軍歌なほ 今も歌へる私の哀しき

(映画一枚の葉書を観て)



汽車に乗り母と着物を米芋と 交換に行ったあの夏の日よ

北朝鮮 アナウンサーのそのままに 「戦争状態に入れり」と十二月八日

メガホンの「空襲警報解除」という その一声の明るき響き

親も子も壕出でたれば眩しげに 荷物両手に深呼吸せり

壕出ずに二人になったサッチャんと 半分に分けあいし干しいもの味



疎開地で 熊野本宮にて

炎天下手漕ぎの舟で幾時間 熊野川上流へ疎開した日よ

櫓の軋む音のみ耳に皆無口 敵機の襲来無きを祈りて

人と荷で身動きとれぬ幾時間 帽子傘等誰ひとり持たず

(B29 が飛んでくればかくれるところがない川の上です。  
びくびくしながらの船の上でした。小学生の泳げない私は、  
死を覚悟しました。)



逃れ来し熊野本宮静かなり 警報無き夜をぐっすり眠る

霧流る山あいの朝静かなり 鶯の声澄みて聞こゆる

玄米を一升びんに棒で突く 時間をかけて疎開地のこと

藁草履編んでもらうが嬉しくて 重き砵で藁を打った日

熊野川を手漕ぎの船で疎開せり 櫓を軋ませ本宮川上へ

頭たれ「耐へ難きを耐へ」に咽びある 大人の背に感じた不安

(終戦の日玉音放送に)

電燈の灯火管制の黒布はずし 終戦の夜の眩き明かり

正座してこの日に叔父はラジオ聞き 負けたのではない終わったと言いき

終戦すぐ裁判書類を焼却炉へ 煙にまみれし叔父を忘れず

終戦日疎開地に聞く蝉嵐 号泣ならむと子供心に

正座するラジオの前の大人見て 嗚咽する背に不安迫り来

疎開せし本宮小で早朝の 本宮大社へ戦勝マラソン

(八月十四日迄)



## 終戦後

お金よりお米の方がと下宿代 戦後も引きずる学生時代

戦争の終わりにて空襲気にせずに 磯のばい貝見付けし喜び

黒板に戦後初めて先生の 大きく書いた「民主主義」の字

疎開地に別れを告げて帰りこば 飢じきながらも友らの笑顔

忘れ得ぬ戦後初なる授業での 今の気持ちを言はされしこと

「性別で差別されずに勉強の 出来る時代よ」と母は私に

(小六の時新憲法に)

八月がきて思い出す那智参道 ハーモニカ吹く傷痍軍人

空襲に「ちりきって逃げた」 「おとろしかった」 真剣に話す方言懐かし

グラマンか B29 か爆音を 耳をふさぎて壕に聞き分け

飛び起きし空襲警報に真夜中の 壕で怯ゆる日の来ぬ事を

あの夏が又巡り来て蘇る 正座で聞きし「耐え難きを耐え」

(国民学校六年生)

出陣の絶筆読める悲しみに 「無言館出でて五月の空仰ぐ」

訳わからず墨塗らされし教科書の 何が何故かと思ひて塗りし

(終戦後直ぐ六年生の時)

玉音に大人の嗚咽忘りゃるか 夏の巡りて蝉の哭く

